

札幌市教委 小中各3校で

相談支援リーダー配置

サポートルーム体制強化へ助言

札幌市教委は8年度、校内教育支援センター(サポートルーム)の充実に向け、相談支援リーダーを市立小・中学校各3校に配置する。管理職経験のある相談支援リーダーが各校を訪問し、不登校児童生徒への支援方針やサポートルームの運用について助言する。中学校は4～6月、小学校は10～12月の3カ月間を1サイクルとし、学校が自走できる支援体制の構築につなげる。

文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、6年度の市立小・中学校における不登校児童生徒数は5488人、前年度比227人減と少い状況が続いている。一方で、全児童生徒数の約4%を占めており、一定数の児童生徒が不登校の状態は、学校に行きづらさを感じ始める前兆期や、外部との接続を通して前向きな姿勢が見られる回復期など、様々な段階があると考えられている。個々の状況に応じた丁寧な支援が求められる一方、教員の多忙化が進む中、校内で常時見守る時間を確保することは難しく、外部人材の活用や校内の役割分担の整理が求められている。

市教委は教員経験者や福祉分野の有資格者、大学生などを有償ボランティアとして募り、各校のサポート

ルームで児童生徒を見守る「相談支援パートナース」を市内小・中学校全校で展開。相談対応や登校前の付き添いなどを通して、児童生徒や保護者との信頼関係を築き、学校との接続を途切れさせない役割を担っている。

4～6月は中学校を中心に校内学級の支援委員会へ参加し、児童生徒理解や支援方針の整理を進める。この間、小学校配置校へは月2回程度の訪問支援を行う。7～9月は小・中学校双方への訪問支援を継続し、10月以降は小学校を中心にサポートルームの運用や校内連携について助言する。

市教委は2月20日まで配置希望校を募集し、27日に配置校を決定。3月6日に説明会を行い、4月1日から訪問支援を開始する。教育相談担当課は「各校のサポートルームや校内の関わり方について助言を行い、支援の質を高めるとともに、継続的な体制づくりにつなげたい」と話している。

札幌市内3校 みかほっ子語る会

子の自発性促す環境を

非認知能力主題に講演等

札幌市立美香保小学校(高屋敷優校長、北光小学校(橋本隆校長、美香保中学校(伊達峰史校長)の3校は14日、美香保小を会場として開催。中学校・高校のキャリア教育や探究活動の支援事業を手がける㈱すまいるの月館海斗社長が「子どもたちに育てたい非認知能力」と題して講演した。元高校教員で、プロクラミングスクール勤務を経て起業した月館さんは忍耐



制高校生の学習拠点を一体的に運営したり、生徒が多様な社会人と出会う学習プログラムを学校に提供したりする事業を通じて感じた経験を紹介し「教育に関わる人が増えるほど、人生はより豊かになる」と語った。

SNSの普及やAI時代の到来で情報収集が容易になる一方「大人と子どもが直接関わり、生の声を聞くことの価値はむしろ高まっている」と指摘。先行き不透明なVUCA時代を踏まえ

子どもたちは、フェルトやシートを貼り付けながら自分だけのオリジナルバッグを作製。楽しみながら地域環境に目を向ける大切さを学んだ。小学生は完成したバッグを手に笑顔を見せ「日本の皆さんと出会い、楽しい時間を過ごすことができて良かった」と語った。

文房具でつなぐ世界の輪

札幌市小中学校環境教育研究会(札幌環境研、斉藤健一会長)は1月上旬、カンボジアの小学校を訪問し、札幌の子どもたちから集めた文房具を届けた。1000本を超える鉛筆や消しゴムを贈るとともに、エコバッグ作りの特別授業を実施。環境教育の輪を世界に広げた。

カンボジア小学校に支援届ける

研究会は、現地の子どものために先生方がひた向きに勉強に励んでいる姿から、大きな刺激を受けたと語る。今後は札幌の学校で子どもたちに活動を伝える授業を行い、国際理解教育につなげる。

斉藤会長は「子どもたちの笑顔に国籍や人種は関係はない。地球に生きる同じ仲間として共生の意識や地球環境を守る心を共に育み、様々な国とのつながりをつくっていきいたい」と思いを語る。

作ったエコバッグを手にする子どもたち

札幌市内中高大生 空手道大会 全国の大舞台で好成績 五輪目指し加藤副市長激励

加藤副市長を囲む(左から)河合選手、清河選手、毛利選手、梅村選手



てほしいと激励した。

清河さんは中学1年時に準優勝し、今回念願の初優勝を果たした。昨年11月の影響でベスト8にとどまり、悔しさをばねに1年間練習に励んだという。「学校でも表彰を受け、友人にもすごいねと言われて励みになった」と笑顔を見せた。

全日本ジュニア空手道選手権大会は幼稚園から高校までの発達段階や体重別に組み手試合で競う。「カラテ甲子園」と称されるジュニア最高峰の大会で、各選抜大会を勝ち抜いた選手約1600人が全国から集まった。

篠路中学校の清河大雅さん(3年)は中学2～3年生男子中量級(57キログラム)で優勝。高校女子重量級(55キログラム)では札幌新陽高校の梅村心菜さん(3年)が準優勝し、手稲中学校の毛利圭登さん(1年)は中学

札幌環境研ENPITSU PROJECT

ENPITSU PROJECTは、世界とのつながりを深めながら地球の環境問題を考えるきっかけにすることを目的として開始。斉藤会長が、平成31年に一般社団法人casaが企画した初代プロジェクトに参加したことが契機になり活動をスタートした。



昨年11月から市内の児童館10カ所に回収ボックスを設置。家庭で使わなくなった1000本を超える未使用の鉛筆や消し

来春から社会人になる河合さんは、一般の部は無差別級になるため、学生の部より勝ち上がり厳しくなる。「インカレ2連覇に満足せず、社会人になっても良い成績を収めたい」と抱負を語った。